ケストナーの詩をいくつか

「よくなるでしょうか？　悪くなるでしょうか？」
例年、聞かされる質問だ
本当のところを正直に言おうじやないか
人生って、いつも綱渡り　　「新年に」

素直な感情、明晰な思考、簡潔な言葉ーを旨としたケストナーに、こんな詩がある。「傷心を演ずるのはやめなさい。生きながらえよ、悪人どものじゃまをするために！」といった生き方を、死ぬまでケストナーはやめなかった。

ぼくらは、とうさんたちよりもあとから若者になる
そして、昔起きたことが、ぼくらの肩にかかってくる
ぼくらは、大きな悪人どもの、小さな相続人だ
あいつらがおかした悪事の、責任だけをとらされるのさ　　『腰の上の心臓』「卵つきの哀歌」

ミュンヘンの文芸寄席「見世物小屋」の開幕（1945 年 8 月 15 日）のために、ケストナーが選んだ詩。新作がまだできていなかったので、第一次世界大戦のあとに書いた詩を朗読した。これが、作家ケストナーの戦後の第一声となった。

ぼくらはみんな、同じ列車に乗って旅している
時代を超えて、どこまでも
ぼくらは、外を見る。もう、見るのはうんざりだ
ぼくらはみんな、同じ列車に乗って旅している
どこまで行くのか、だれも知らない　　1932 年「鉄道のたとえ話」

ナチスが運転する列車を、もはや、だれも止められなかった。乗っていたくない者は、とびおりて亡命するしかない。ケストナーはドイツにとどまり、列車に揺られながら、国民とともに地獄へと向かったのだ。執筆を禁じられたため、沈黙の乗客として。

何度でもいおう
たとえどんなに深くココアの中に沈んでも、それを飲んではならぬ　　『椅子の間の歌』「何度でもいおう」

ココアとはナチスの茶褐色の制服を意味しているのだろう。ドイツにいるかぎり、ナチスから逃れることはできない。批判すれば殺されるかもしれない。だから、黙っているしかない。しかし甘い誘惑にのって、心を売るようなことだけはしないぞ。これが、一九三三年以降の、ケストナーがドイツで生きていくための処世法だった。
戦後、ケストナーは多くの人から、こういう質問を受けるはめになった。《ケストナーさん、あなたはどうして、ドイツを離れなかったのですか？》それに答えるように、ケストナーはこんな詩を書いている。

わたしはザクセン生まれのドイツ人
故郷が、わたしを放さない
わたしは、ドイツ育ちの一本の樹
時がくれば、ドイツで朽ちる　　「余計な質問に対する当然の答え」

出典:『ケストナー――ナチスに抵抗し続けた作家』 偕成社 1999 年　クラウス コルドン(著)　那須田 淳, 木本 栄 (翻訳)